

ファーストキス

亜金

ファーストキス

ファーストキス

それは、誰もが一度は経験すること。
だけど僕は、経験したことがない。

キスの平均年齢が、17歳だってさ.....
もう17歳だなんて、ずっと昔に過ぎてる

僕は、レックリングハウゼン病。
小さい頃から病弱で、友達と言える人はいなかった。
近寄るだけで、亜金菌が、うつる近づくな。
僕が、触ったモノには、亜金菌がうつっているからモノには触るな。

物心つく前からこんな感じの人生。

だから、当たり前のようにキスなんてのは、愚か.....
女の子と手さえ繋いだことがない。

理由は、簡単だった。

亜金菌が、うつる。

それが、ずっと耳から離れない。
小さい頃、レックのせいで性的イタズラもされたこともある。
性器の部分もブツブツがあるのか.....
それを確かめたかったらしい。

その人達にとっては、ただの好奇心。
僕からしたら、ただの苦痛でしかなかった。

だから、僕は、人が嫌いだ。

好きなる理由なんて一つもない。

全ての人を殺しても殺し足りないくらい僕は、人を恨んでいるのかも知れない。

でも、殺す勇気なんて何処にもない。

小さい頃、生きるのが嫌で、毎日泣いていた。

だけど、死ぬ勇気なんて、みじんもない。

ファーストキス

一日が過ぎる度に、生きるのが辛くなる。
一日が過ぎる度に、死が近づくことに喜びを感じる。

そんな毎日。

退屈な日々。

苦痛とも言える生きる道。

近づく人は、僕の少ないお金を「お金は使わないと景気がまわらない」とか意味不明のことを言
って近づく人。

だから、距離をとった。

近づく人は、みじめな僕を見下し、自己満足を得る人.....

だから、距離をとった。

近づく人は、見世物のようにし、僕をののしる事で自分の存在意義を保とうとする人。

だから、距離をとった。

そうやって人を切っていくうちに独りぼっちになった。

別に一人が、寂しい訳じゃない。

一人の方が、気が楽になれた。

一人ぼっち。

これが、一番怖い事だと思った。

でも、いざなってみるとそうでもない。

誰かが言った。

好きの反対は、無関心。

大人になるにつれ、僕のレックに関して、無関心な人が増えてきた。

たまに、子供に意思をぶつけられるけど.....

それは、仕方がない、だって僕は、化け物だから.....

小さい頃の話に戻るけど、小さい頃はよく「化け物」といじめられた。
助けてくれる人も居なかった。

教師からは、「いじめられる原因がある方が悪い」

と言われた。

いじめられた原因は、レックだけじゃなかったのかもしれない。

もしも、僕が、喧嘩が強く短気で、なおかつ暴力的な人だったら……

いじめられることはなかっただろう。

そういう性格に生まれた方がよかったのかな？

でも、僕は、石を投げられてもバットで殴られても、エアークンの的にされても泣くしかできなかった。

声をあげて泣けば、誰かが助けてくれる。

そう思っていた。

だけど、誰も助けてくれないことに気付いた時。

僕は、声を上げて泣くのを止めた。

僕は、殴り返さなかった。

殴り返せば、心まで化け物になる気がしたから……

僕は、一人。

僕は、一人。

僕は、一人。

そう思い続けることが、僕の心を保つ唯一の方法だった。

僕は、人を好きにはならない。

それは、相手を怖がらせるだけだから。

僕の心には、誰もいない。

居たとしてもすぐにはなくなるから……

孤独とは、誰かが周りにいないと感じないモノ。

だから、心には誰もいない。

置かないようにしている。

ファーストキス

全てに絶望し、全てに期待しなくなった時。
僕は、君と出会った。

君は、誰に対しても優しくかった。

そして、その優しさは僕の方へも向けてくれた。

初めての優しさ。
初めての心の温もり。

僕は、嬉しかった。

好きにならない努力をしたけれど.....
それは、無駄に終わった。

僕は、努力をしたけど.....
彼女のことを好きになってしまったみたいだ。

だから、距離を置いた。

嫌われてしまう。

そんな気がしたから.....

だから、距離を置いた。

心に君を置いてしまう.....

そんな気がしたから.....

だけど、距離を開ければ開けるほど……

君は、僕との距離を縮めた。

好きになってしまった。

もう、こればかりは止められなかった。

君のことを考えれば、胸が温かくなった。

君のことを考えれば、胸が苦しくなった。

辛い時苦しい時、君の声が聞こえるような気がした。

涙の時は、君が頭を撫でてくれる。

そんな気持ちが次から次へと溢れ出る。

甘く切ない気持ち。

ファーストキス

僕は、歩くのが遅い。

だけど、君は、僕の歩幅に合わせて歩いてくれる。

僕は、食べるのが遅い。

だけど、君は、僕に合わせて食べてくれる。

僕は、喋るのに時間がかかる。

だけど、君は、僕の話を生懸命聞いてくれる。

好きというきもちが強くなる。

ぎゅっとしたいきもちが強くなる。

だけど、僕の心がささやく。

「お前は、化け物だ……」

彼女のことを思う度に、その言葉が耳に残る。

「お前は、化け物で人間じゃないから、人を好きになったらいけない」

小さい時に言われた言葉。

今までずっと封印していたことばが、僕の心の中で繰り返す。

辛い、苦しい。

助けて……

助けを求めたけど、誰も助けてはくれない。

だから、君と距離を置くことにした。

嫌われるなら、早い方が良い。

ファーストキス

僕は化け物。
ただの化け物じゃない。

人に憧れる化け物。

異性と手を繋ぎ、色んな街へ出かけたり。
買い物したり、ゲームしたり、遊園地に行ったり……

そんなありきたりな世界にあこがれる化け物。

叶ったことはない。
叶うことは無い。

少し切ない気持ち。

君には、彼氏が居る。
素敵な君だから、仕方がないこと。

でも、僕には関係なかった。
僕は、化け物。

人にはなれないし人には慣れない。

僕は、小さく頂垂れる。
小さくなってうずくまる。

誰かが、僕の頭を突く。

君だった。

心の中ではなく、現実の世界。

「行こう」

彼女は、そう言って僕の手を引っ張った。

憧れていた現実。

望んでいた世界。

僕は、顔を真っ赤にして歩いた。

ファーストキス

彼女と色んな話をした。
彼女は、彼氏とケンカしたらしい……
彼氏と別れる寸前らしい。

僕の心のどこかが揺らぐ。

その彼氏と女の子一緒にあるいている。
そして、彼氏と君の目と目が合う。

「走って……！」

君は、一言そういうと全速力で走った。

僕は、彼女のあとを追いかけた。

走りついた場所は、マンションの入り口。

僕のあとを彼氏が、追いかける。

僕は、君の肩を叩いた。

初めて、女の子に自分から触れた。

君は、振り向くと涙でぐしゃぐしゃになっていた。

彼氏が、心配そうにこちらを見ている。

その時だった。

君は、僕の体を抱きしめた。

そして、僕の唇にキスをした。

初めてのキスだった。

頭の中が、真っ白になる。

何が起きているのかがわからない。

君の柔らかい感触。

そして、君の吐息。

色んなモノが、ゆっくりと僕の中に入ってくる。

その間も、彼女は、いっぱい涙を零した。

彼氏は、舌打ちをするとその場をゆっくりと去った。

彼氏の姿が見えなくなるまで、君と僕はキスを続けた。

ファーストキス

「ごめんね……」

君は、僕に謝った。

「うん」

僕の心の中は、空っぽになった。

色んな憎しみや色んな感情が空っぽになった。

僕を受け入れてくれる人が、現れたのかもしれない。

僕は、勇気を出して君を抱きしめた。

君は、僕の胸の中でいっぱい泣いた。

僕は、人になってもいいのかな？

僕は、人になれるのかな？

僕は、勇気を出して告白を……

と思ったけど出来なかった。

それは、僕に勇気がなかったから……

君が、自殺したと聞いたのは、それからすぐにことだった。

遺書には、彼氏にふられたことが理由と書かれていた。

そして、僕宛に届いた一枚の手紙。

そこには、「ごめん」とだけ書かれていた。

もしも、僕があの時勇気を出していれば、君は死ななかつたのかな？

もしも、僕があの時……

僕の中で、色んなモノがぐるぐると回る。

僕は、ただ後悔した。

好きと言えなかつたことを……

-おわり-